

シルク・ロードと犁——トルキスタン型インド犁をめぐる東西交流

応 地 利 明

はじめに

「アジアにおける犁の分布と系列をどのように考えるか」という問題について、フィールド・ワークで収集した資料に語らせつつ、自分なりの素描を示したことがある[応地利明 1987: 169-212]。それは、ユーラシアの犁を語る際に常に参照されるヴェルトの仕事[Werth 1954(藪内・飯沼訳)]を、なんとか乗り越えたいという意図からでもあった。しかしその後の資料収集の進展につれて、このときの整理はまさに素描にすぎなかったと実感し、修正したいところも多い。そのなかで最も補足ないし修正したいと考えているのは、東南アジア島嶼部と内陸アジアの部分である。この小論では、このうちの内陸アジアに焦点をあわせて、その補足を試みることにしたい。

吉田光邦先生の追悼号に犁に関するテーマをとりあげるのは、私事にわたるが、かつて先生とこの問題についてお話ししたことがあるからである。それは、もう30年近く前の1964年のことであった。先生と泊まりあわせた北アフガニタンのクンドゥズという町の宿で、その周辺がインド犁系列に属する犁の孤立的な分布地帯であることをお話しした記憶がある。この小論は、その記憶に触発された先生との対話の続編でもある。

1 北アフガニタンの犁——その特質

まずクンドゥズ周辺に分布する犁を示そう。それは、写真1のような犁である。この犁をめぐる形態的な特徴は、つぎの3点にある。

1) 犁はいくつかの部位あるいは部材から構成されているが、その基本となるのは、耕土のなかに入って耕起していく犁底、その先に取りつけられ土を開いていく鉄製の犁先、犁の本体にあたる犁身、前をいく役畜に犁を結合・固定させる犁轅、の四つである。写真1の犁がもつなによりの特徴は、これらのうち、犁身と犁底とが一体となって同じ部

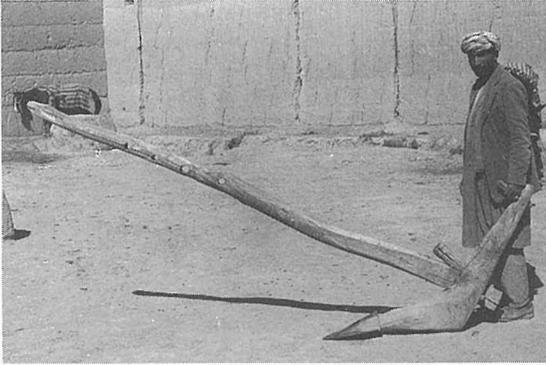


写真1 クンドゥズ周辺の犁——トルキスタン型インド犁

材できていること、そして犁轆が犁身に取りつけられてそこから前方にのびていること、の2点にある。これらの特徴は、この犁が形態的にはインド犁の系列に属することを示している。

2) 犁底の先にとりつけられた鉄製の犁先は大きく、しかも内部が空洞になっていて、その空洞部に犁底の先端を差し込んで固定

する方式である。つまり着脱が自在にできる、ソケット式あるいはキャップ式ともいえる形式の犁先である。使用しないときには、犁先はとり外して犁体とは別個に保管される。

3) この犁先は、鍛鉄ではなく鑄鉄製である。また鑄鉄でなければ、このような継ぎ目なしソケット構造の犁先をつくることは困難である。

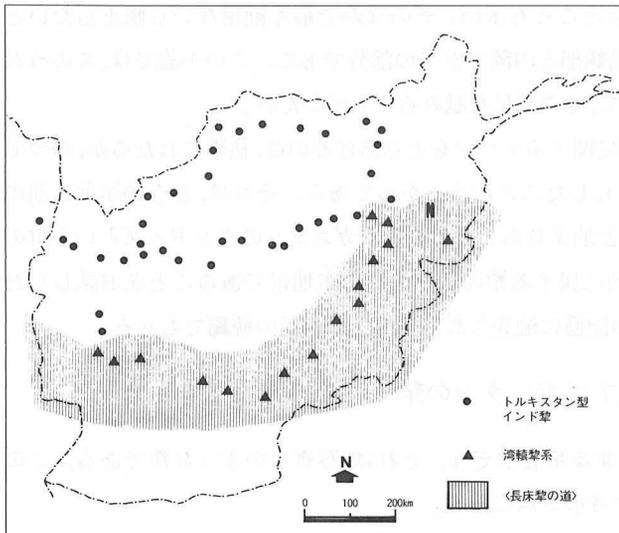


図1 アフガニスタンにおける犁型の分布(1964年調査)

これらの三つの特徴について、もう少し注釈をくわえることにしたい。1)で、この犁がインド犁系列に属すと述べたが、その犁型はインド犁の典型とはいえないことである。というのは一般にインド犁は、犁底を欠く(無床犁)か、あるいはにしても短い(短床犁)という特徴をもつとされる。写真1の犁は明瞭に犁底をもち、しかもその犁底の長さは犁

の本体(木製)でも64.5センチ、それに犁先をかぶせると74センチにも達する。いかえれば、それは長床犁的な特徴をもつインド犁なのである。

さらにこの犁は、分布においても特異性をもつ。1964年の調査結果[織田・末尾・応地1967]をもとに、アフガニスタンにおけるその分布を示したのが、図1である。図にみるとおり、その分布は、北部アフガニスタン平原とその南を東西走るアフガニスタン中央山塊地方とにほぼ限られている。インド犁は、「インド」と冠するその名称が示すように、インド亜大陸に分布の中心をもつ。写真1の犁に類似する犁型の犁をインド亜大陸にもとめると、同亜大陸北東端のアッサム地方にみいだされる。つまり写真1の犁型をもつ犁は、インド犁の分布域の北西と北東の両周辺部にみられることになる。しかし両者の分布状況には、大きな相違がある。それについて、少し説明したい。

アッサム地方の犁の場合、同地方に接するベンガル(バングラデシュを含む)地方も、やはりインド犁系列の犁の分布域に属している。つまりアッサム地方のこのタイプの犁は、中心から周辺へと連続的に分布するインド犁分布圏内の北東周辺部を形成しているといえる。これに対して写真1に示した犁型の犁の場合は、図1に示したとおり、その分布域の南に接して湾轅犁系列の犁がベルト状に東西に走る。湾轅犁とは、写真2に示した犁型をもつ犁をいう。それは、形態的にも機能的にもインド犁とは全く別個の系列に属す

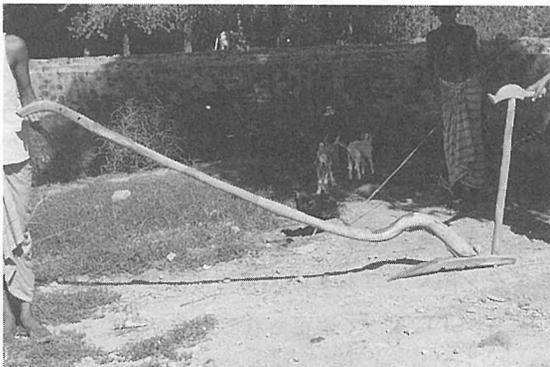


写真2 湾轅犁

る犁である。この湾轅犁の分布ベルトは、前稿で指摘したように、地中海沿岸からアジア大陸南部を横断して、中国の長江中下流平原にまで続く<長床犁の道>の一部をなす。この<長床犁の道>の存在によって、写真1に示した犁の分布域は、インド亜大陸に中心をもつインド犁の核心的な分布圏から分断されることになる。つまり

アッサム地方の場合とは異なって、北部アフガニスタンのインド犁分布域は、インド犁の核心的分布圏から分断され、一見、孤立して存在していることになる。そのため図1をもって、それが、一意的にインド犁分布圏の北西周辺部を構成するとはいいがたい。このことを指して、かつて吉田先生にクンドゥズ周辺がインド犁の孤立的な分布地帯だとお話したのであった。

つぎに前記の2)・3)で述べたこの犁の犁先がもつなよりの特徴は、それが、鑄鉄製であることである。トルコ・イラン・アフガニスタンからインド亜大陸東部へと及ぶ広

大な領域で、鑄鉄製の犁先のまとまった分布域は、ほぼここだけである。またこのようなソケット式の犁先も、この地帯以外ではほとんど観察されない。しかも大きさも大きい。写真1の犁の犁先の寸法をあげると、長さが33センチ、最大幅25センチ、横楕円形の空洞部の内径は12×15.5センチである。この意味で写真1の犁は、犁先の材質・形態においてもきわめて特異である。

図1で示した領域を除いて、トルコからインド亜大陸東部に至るその他の地帯に分布する犁先について述べると、その形状・大きさはともに多様である。しかしそれらは、重要な共通性をもつ。それは、①鍛鉄製であること、②余り高温とはならない木炭火力で鉄片を鍛造・加工して、村の鍛冶職人によって製作されること、③犁底への取り付け法は犁底の先端に差し込まれるか、あるいはその上面に止め金で固定されるかのいずれかであること、の3点である。これらの共通性は、写真1の犁の犁先にはあてはまらない。つまり写真1の犁は、犁先においても、トルコからインド亜大陸にまで及ぶ広大なアジア大陸南縁部のなかでは、例外的ともいいうる特異な特質をもつ。

このような諸特質をもつ写真1に代表される犁を、その主たる分布地帯が北アフガニスタンの平原部にあることから、トルキスタン型インド犁と名づけることにしたい。それは、基本的にはインド犁の系列に分類しうるにしても、上述したように、犁型・犁先の材質と形態、またその分布の態様において、きわめてユニークな特質をもつ。単に分布域の孤立性の指摘にとどまることなく、トルキスタン型インド犁のもつこれらのユニークさをどのように理解すればいいのであろうか。

この問題に接近するためには、まずトルキスタン型インド犁の分布の広がりについて検討しなければならない。アフガニスタン内におけるその南方への広がりには、すでに<長床犁の道>の存在で指摘したように、図1によって確定されている。またイラン領内つまり西方への広がりも、図1に示したとおり、アジア・ハイウエーA1号ぞいにアフガニスタン国境を越えてイラン領内に約40キロメートル入ったあたりを西限とする。問題は、アフガニスタン国境を越えた東方と北方への広がりである。

2 トルキスタン型インド犁の東方への広がり

図1にNと記入した一帯は、ヌーリスタンである。そこは、1960年代はじめの王政時代にも外国人の入域禁止区域であったので、犁についてもくわしい状況は分からない。しかしウィーン(オーストリア)の民族学博物館のヌーリスタン室に陳列されている犁は、写真2に掲げた湾轆犁と同形である。したがってヌーリスタンは、トルキスタン型

インド犁の非分布域としてよいであろう。

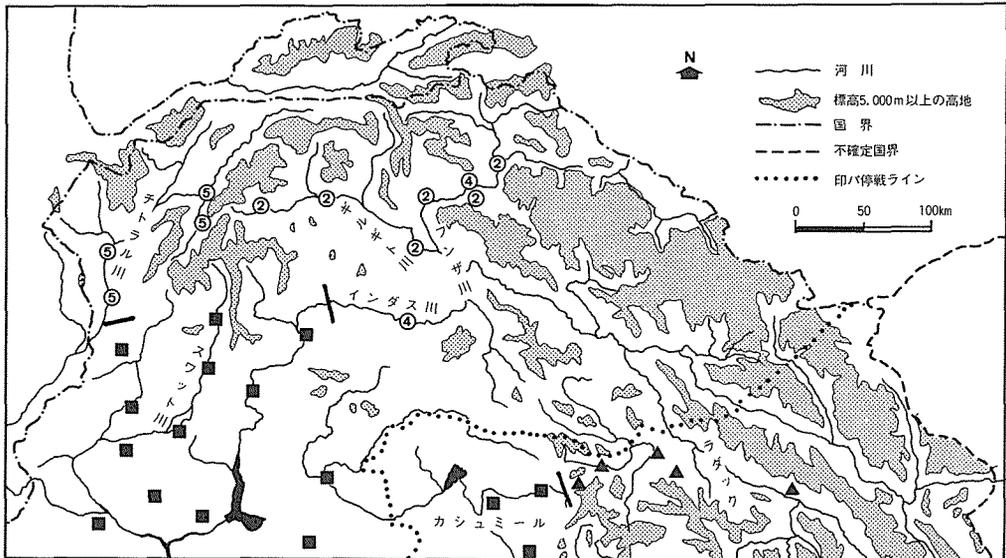
しかしトルキスタン型インド犁と同形の犁は、ヌーリストーンの東を画するアフガニスタン国界を越えて、ヒンドゥークシュ山脈ぞいにパキスタン領内のチトラール谷にも分布する。この点は、すでに1964年の調査で確認していた。問題は、チトラール谷以東での分布状況である。1989年にこの点をあきらかにすることも目的の一つとして、パキスタンとインドにまたがるカラコルム=カシュミール地方で調査をおこなった。

パキスタン側での調査ルートは、スワット谷からチトラールに至り、さらに北上して東に転じたのちシャンドゥール峠を越え、ギルギト河谷を下ってギルギトに至り、そこからさらにカラコルム・ハイウエーぞいに北上して、フンザを経てクンジェラブ峠南麓にまで至るものであった。インド側では、ジャンム=カシュミール州の州都シュリーナガルからラダックのレーへと至るルートであった。このうちフンザ路とラダック路は、歴史的にもカラコルム越えの内陸アジアへの主要キャラバン・ルートにあたる。以下の説明では調査ルートを四つに分けて、西から順にスワット=チトラール河谷、ギルギト河谷、フンザ=インダス河谷、ラダック=シュリーナガル・ルートと名づけることにしたい。これら諸ルートぞいの訪問村落で観察しえた犁の形態は、次ページ図2のように整理される。同図から、つぎの諸点があきらかである。

ア) カラコルム=カシュミール地方でのインド犁系列と湾轆犁系列の分布状況を全体としてながめると、アフガニスタンにおける両者の分布状況ときわめて同形的なパターンを示していることに気づく。その同形性は、二つの点でみとめられる。第1は、北方の山間峡谷部におけるインド犁系列、南方のより広い山間河谷盆地部における湾轆犁系列という分布対照性の存在である。両者の分布範囲は、図2に太線で部分的に記入したように、明確な地形的障害で分かれた。まずスワット=チトラール河谷ではロワーリ峠、フンザ=インダス河谷では山間盆地を離れて先行性峡谷へと移行する部分、ラダック=シュリーナガル・ルートではガーガンキル=ゾジ峠がそれにあたる。これらの峡谷や峠の南方に分布する湾轆犁の犁型は、写真2に示したものと同一である。もちろんこれらは、すでに指摘したアジア大陸を横断する<長床犁の道>の一部を構成する。その存在により、第2の同形性が生まれる。それは、アフガニスタンにおけると同じくカラコルム=カシュミール地方でも、北のインド犁が<長床犁の道>によってインド犁の中核的な分布地帯から分断されていることである。

イ) 北方の山間峡谷部で観察される犁はすべてインド犁系列に属するが、それらをさらに二つに分類しうる。一つは、数字入りの○印で示したトルキスタン型インド犁で、対

図2 カラコルム=カシュミール地方の犁の分類と分布



犁 型								
犁 先								多 様
タイプ	①	②	③	④	⑤	▲		■

象範域西半のチトラール河谷とフンザ=インダス河谷とに分布する。つまりトルキスタン型インド犁が、アフガニスタン北東国界を越えて、ここまで広がっているのである。もう一つはラダック地方にみられるもので、▲印で図示したタイプの犁である。それは、犁身と犁底が一本の細材でできている点ではインド犁系列に属するが、犁底部分の両側に厚板がとりつけられているのを特徴とする。このような寄せ木的な犁底をもつ犁は、管見の限りではインド亜大陸の他の地方には存在しない。厚板を取りつけることにより、犁底を幅広にするとともに、犁底の平面形を前方に突な三角形態に仕立てている。それは、乾燥高地帯に属し、大きな部材を確保しえないラダック農民が生み出した工夫であろうか。ラダックは、小チベットともよばれるラマ教徒の世界である。しかしより東方のチベット本体部でも、このような犁はみられない。とすると、これはラダック特有の犁

といてよいのかもしれない。

ウ) 前述したとおり、対象領域西半に分布する犁は、トルキスタン型インド犁の犁型をもつ。しかしその犁先について検討すると、それらは、北アフガニスタンにみられるトルキスタン型インド犁とは異なっている。図2の凡例に掲げたトルキスタン型インド犁の犁先分類のうち、タイプ①が北アフガニスタンのものと同形である。しかしそれは、図2であきらかなように、1989年時点でのカラコルム=カシュミール地方には分布しない。そこに分布するのは、②・④・⑤の諸タイプである。タイプ②はやや厚い鉄材からなり、犁底前部上面を覆うようにしてはめ込まれるものである。ギルギト川とフンザ川はギルギトで合流するが、これは、その合流点よりも上流部に分布する。タイプ④は薄い鉄片でできた犁先で、犁底の先端にあけられた穴に差し込んで固定される。これは、フンザ=インドス河谷に点在するのみで、まとまった分布域をもたない。タイプ⑤は先端がやや尖った長い細身の鉄製犁先で、犁底の後部から犁底先端へと貫通する穴に後方からつきさして固定される。これは、チトラール河谷の村々に分布する。これらの犁先は、いずれも、形態だけでなく、材質が鍛鉄であるという点でも、北アフガニスタンのものとは異なっている。

エ) つまりカラコルム=カシュミール地方にみられるトルキスタン型インド犁は、犁型では北アフガニスタンと同じではあっても、犁先では北アフガニスタンのそれを特徴づける鑄鉄製ソケット式のもの(図2のタイプ①)を欠いていることになる。これを、どのように考えればよいのであろうか。これに関連して、図2でギルギトからフンザ川をさかのぼった最北の村パッソーで、興味ぶかい観察とききとりを得た。図2に示したとおり、現在この村で使用されている犁先は、タイプ②のものである。しかしかつては、北



写真3 パッソー村に残る鑄鉄製ソケット式犁先

アフガニスタンのものと同形のソケット式鑄鉄製の犁先、つまりタイプ①も使用されていたという。現在廃用されたその残骸を示したのが、写真3である。これは、北アフガニスタンのものとまったく同形であるが、完全に使い古されているので、その実寸は長さが19センチ、最大幅が14.5センチしかない。村人によると、新品ならそれ

ぞれ約30センチ、25センチはあるという。その寸法は、前述したクンドゥズの犁先にほぼひとしい。さらに村人は、このタイプ①の犁先をティシュ、タイプ②のものをノウェックとよぶ。実はクンドゥズをはじめ北アフガニスタン一帯でも、タイプ①の犁先を同じ名でよんでいる。しかも村人は、ティシュが北方の中国シンチアン=ウィグル自治区のカシュガルからもたらされていたという。これに対してタイプ②のノウェックは、同村もパキスタンに属するのであるが、「南方のパキスタン」からもたらされたという。このようにタイプ①の犁先は、名称・大きさともにクンドゥズ周辺のものと同縁性をもつ。それは、あたかも両者のあいだにおける共通祖型の存在を暗示しているかのようである。

オ) この二つの犁先は、パッソー村ではどのように使われていたのであろうか。きまわりによれば、タイプ②のノウェックは石や礫の多い耕地また凹凸の多い地形の耕地で用いられ、タイプ①のティシュは石などの少ない平坦な耕地で使用されたという。ティシュを前者の耕地で使うと、破損しやすいという。これは、ティシュが横楕円形の空洞部をとりまくように鉄片状の張り出しをもつこと、鑄鉄製のためその部分の強度が弱いことと関係していよう。それは、本質的に軽土のレス的土壤の耕地に適した犁先である。クンドゥズ一帯を含む北アフガニスタン平原は、まさにこのような土壤条件の地にあっている。現在のパッソー村では石のない平坦な耕地での整地作業はトラクターでおこなわれるようになったため、タイプ①のティシュの使用は廃絶してしまった。一方、石や礫の多い耕地また凹凸の多い耕地は依然として牛耕に依存しているので、この村では現在タイプ②のノウェックのみが使用されるにすぎないという。この変化は、同時にカラコルム・ハイウェー開通以後、パッソー村のようなカラコルム最奥地の村落をもまき込んで、いかに急激な農業変化が進行しつつあるかを物語る。

以上のように、少なくとも犁型に関するかぎり、トルキスタン型インド犁は、ヌーリスターン、ディール、スワット、ハザラー、シュリーナガルの諸地方を貫く〈長床犁の道〉以北で、フンザ——ギルギト——インダス河をむすぶ線以西の範囲、つまりカラコルム=カシュミール地方の西半部に分布を広げていることをあきらかにしえた。そして印パ停戦ライン直南のラダック=シュリーナガル・ルートぞいには、トルキスタン型インド犁とは異なった別系列のインド犁が分布することもあきらかにしえた。この両者の間に介入するスカールドゥーを中心とするバルチースターン地方の状況はなお確認しえないが、種々の報告[木原均 1956：写真48]から考えて、少なくとも犁型にかぎってはトルキスタン型インド犁と同形と推察される。これらのことから、トルキスタン型インド犁の分布東限は、現在のところ印パ停戦ラインあたりにあると考えられる。

さらにこの調査を通じての興味ある発見は、前記エ)で指摘した中国シンチアン=ウイグル自治区のカシュガルからの、北アフガニスタンにおけるとおなじ鑄鉄製のソケット式犁先の流入である。これについては、トルキスタン型インド犁の北方への広がりを検討したのちに、あらためてとりあげることにしたい。

3 トルキスタン型インド犁の北方への広がり

アフガニスタンの北方には、西からトルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタンの各共和国がならんでいる。これらの諸国には、どのような犁が分布するのであろうか。管見の限りでは、その空間的な分布状況を図示した研究はみあたらない。また私にとっても、ここは未調査の領域である。まずはいくつかの文献から、断片的に知りうるところを記してみよう。

ヴェルトは、ユーラシアにおける犁型の分布を示した略図で、この領域をふくむ一帯をインド犁の分布域としている [Werth 1954(藪内・飯沼訳)：8]。その内陸アジアにおけるおおまかな境界は、西境がイラン東部国界からカスピ海東岸を経てウラル山脈に至る線、東境がチベット、チンハイ、シンチアン=ウイグル自治区の各東部境界をむすびつつモンゴル中部にまで至る線に指定されている。ただし彼は、この領域の内部における犁型の違いについては、ほとんど述べていない。

オードリクールとブリュヌヌ=デラマールは、トルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタン3か国がインド犁の分布域に属することを指摘するとともに、タジク語でオマッシュとよばれる犁の図をヴァヴィロフの著作から引用している [Haudricourt et Jean-Brunhes Delamarr 1955：303-305]。それは、タジキスタン西部のザラフシャン地方の犁で、その犁型および犁先の構造は写真1のクンドゥズの犁とまったく同じである。

アフガニスタンの北部国界に接する前記の3か国の北方に所在するカザフスタン共和国については、カザフ共和国科学アカデミー歴史・考古・民俗学研究所の研究 [Академия Наук Казахской ССР, Институт Истории, Археологии и Этнографии 1980]がある。この研究は犁の分布図を掲げてはいないが、同国でみられる犁型についてくわしく記している。それによると、わずか1例をのぞいて、他はすべてインド犁系列のものばかりで、しかもそれらは、写真1のクンドゥズの犁と同形である。

とすると、この小論でトルキスタン型インド犁と名づけたクンドゥズの犁は、アフガニスタン北境を越えて旧ソ連領中央アジア諸国一帯に広がっていることになる。その北限は、同アカデミーの研究からカザフスタン北部地方にあるのではないかと推測される。

それでは、その分布西限はどこに設定できるだろうか。ソ連科学アカデミー民俗学研究所 [Академия Наук СССР, Институт Этнографии 1967] は、ウラル山脈以西のヨーロッパ=ロシアを対象として、各種民具類のタイポロジーとその分布図を作成している。それによると、ヨーロッパ=ロシアでみられる耕具類はすべていわゆるロシア対犁であり、インド犁系列の耕具はまったく記載されていない。これらのことを勘案すると、ヴェルトが指定したインド犁の分布西境線は、ロシア対犁とトルキスタン型インド犁との分布を画する線として妥当と考えられる。

残された最後の問題は、トルキスタン型インド犁の内陸アジア北東部への広がりである。すでに2章で、シュリーナガル=ラダック・ルートにおける犁の分布を検討した際に、ラダックのみならず、その東につづくチベットもインド犁地帯ではあるが、その犁はトルキスタン型インド犁とは異なることを指摘した。したがってトルキスタン型インド犁の分布は、内陸アジアの東部では、カラコルム、クンルン両山脈の以南には及んでいないと考えられる。この両山脈の北によこたわるのは、タリム盆地である。2章のエ)で、トルキスタン型インド犁とまったく同形のソケット式鑄鉄製の犁先が、タリム盆地西端部のカシュガルからパッソー村に将来されていたとのききとりを紹介した。すると、カシュガルの犁はトルキスタン型インド犁に近いことになる。ヴァヴィロフは、カシュガルで実見した犁を図示している [Вавилов 1934(中村訳)：258]。それは、トルキスタン型インド犁の犁型をもつ犁である。その他の資料によっても、タリム盆地西半部の諸オアシスに分布する犁は、これと同形である。したがって、少なくともタリム盆地西半部は、トルキスタン型インド犁の分布地帯としてよい。

敦煌莫高窟や安西榆林窟に残る唐代～宋代の洞窟壁画は、犁耕風景を多く描き込んでいる。そこに描かれている犁は、犁底と犁先の形態までは分らないが、そのほとんどがインド犁系列の犁型をもつ。しかもそれらの犁轅は直材で、2頭の牛に掛けわたされた軛に連結・固定されているものが多い¹⁾。つまり敦煌周辺は、すでに唐代～宋代にはインド犁系列の犁の分布地帯であった。現在の敦煌・安西一帯では、扛犁とよばれる在来犁が使用されている [中華人民共和国農業部編 1958：4]。それは、トルキスタン型インド犁ではないが、やはりインド犁系列の犁型をもつ(ただし犁轅は曲材化している)。

では現在、インド犁系列の犁は、敦煌を越えて東方にどこまで延びているのであろうか。敦煌の東に連なる甘粛省の河西回廊、同回廊の東の終着点である蘭州北方の皋蘭、そしてその東方の西安を越えた陝西省関中地区には、おのおの二牛抬杠、皋蘭土犁、関中耩犁とよばれる在来犁が分布する [中華人民共和国農業部編 1958：3-6]。このうち二牛抬杠を

のぞくと、他はいずれも、前記の扛犁の場合と同じく犁轆は曲材であるが、犁型はインド犁系列に属する。ここで注目されるのは、二牛抬杠である。それは、直材の犁轆を牛2頭用の二重軛に固定する方式の犁で、上に列挙した他の犁よりもインド犁に近い構造をもつ。『農具図譜』は、この犁について、「是レ古老ノ農具ノ一、約1500年ノ歴史ヲ有ス」と注記している[中華人民共和国農業部編 1958:3]。この年数の根拠は不明であるが、相当な古い歴史をもつ犁であることには相違ないであろう。インド犁的犁型・直材犁轆・二重軛という二牛抬杠と敦煌壁画のほとんどの牛耕図との共通性から考えて、もしかすれば、唐代の敦煌壁画に描かれている犁の原型はこの二牛抬杠かもしれない。ここでは上述した敦煌から関中地区にまで達するインド犁系列の犁の連なりが、いわゆるシルク・ロードに沿って東進していることに留意しておきたい。

これと関連して注目されるのは、前漢末と推定される甘肅省武威県磨咀子漢墓出土の加彩牛犁模型である[読売新聞社 1979:図58]。その犁型は、インド犁系列とは別個のチベット犁的な特徴をもつ。武威県は河西回廊東端に位置し、インド犁の東方への分布ベルト上に載っている。とすると、少なくとも河西回廊の東端部一帯は、漢代にはチベット犁の分布地帯であったのであろうか。漢代以後のシルク・ロードをめぐる東西交渉の活発化とともに、チベット犁を代替する形で、ここが東進する<インド犁の北方ルート>にくみ込まれ、現在のようなインド犁系列の犁の分布地帯と化したのではないか、という仮説をいま私は抱いている。つまりこの一帯へのインド犁の登場は、磨咀子出土の牛犁模型や敦煌壁画の牛耕図などを考慮にいれて、漢代以後唐代以前と考えるのである。この措定は、宮崎市定の「東西を結ぶ絹の路の上を、古代から隋唐頃までは、文化は大たいにおいて西から東へ流れていたと見てよい」との指摘[宮崎市定 1957-a:380]とも対応する。もちろんこれらのインド犁がすべてトルキスタン型インド犁ではないことは、すでに前述した。しかし少なくともタリム盆地西半部は、トルキスタン型インド犁の分布範囲に属しているとしてよいであろう。

おわりに——鑄鉄製犁先をめぐる

この小論では、北アフガニスタンのクンドゥズ周辺にみられるインド犁をトルキスタン型インド犁と名づけ、その分布と系譜について検討した。明らかにしえたソケット式の犁先をもつ典型的なトルキスタン型インド犁の分布領域を要約していえば、北方から時計まわりに、[カザフスタン北部——タリム盆地西半——アフガニスタン東境——アフガニスタン中央山塊——カスピ海東岸——ウラル山脈東麓]をむすぶ線で囲まれた領域

ということになる。この広がりには、予想を上まわる広大さといわねばならない。ソケット式の犁先を共伴しないが、トルキスタン型インド犁と同形犁型の犁が、この領域を越えた東南方のカラコルムの山岳地帯に分布することも、この小論であきらかにすることができた。

何度も強調したように、このトルキスタン型インド犁の分布領域およびカラコルム=カシュミール地方の南方には、湾轆犁系列の犁型をもつ長床犁の分布ベルト、すなわちアジア大陸南部を横断する<長床犁の道>が走っている。この<長床犁の道>の南方には、ほぼインド亜大陸を覆ってインド犁の中核的な分布地帯が存在する。ここから、<長床犁の道>によって分断された南北二つのインド犁地帯の併存関係を、どのように考えればよいかという問題が生じる。しかしこれについては、紙幅の関係から、この小論ではすべて省略することにした。

最後に、犁先と犁型の両面から、トルキスタン型インド犁の系譜についてふれておきたい。その犁先が鑄鉄製のソケット式であること、また鑄鉄製の犁先はトルコからインド亜大陸東部へと至る広大な範囲内ではほぼここだけに存在すること、についてはすでに指摘した。結論からいえば、このユニークな鑄鉄製犁先の起源は、中国にあると考えられる。

鑄鉄利用は、古代中国が達成した重要な技術革新であり、漢代に一つのピークに達するといわれる[宮崎市定 1957-b: 407]。ソケット式の鑄鉄製犁先をとりあげても、すでに中国各地から漢代のものが大量に発見されている[陳文華・張忠寛編 1981: 162-165]。前述した磨咀子漢墓出土の加彩牛犁模型も、子細に観察すると、キャップ式の犁先を装着しているかのように、犁底の上面と底面とに黒く彩色されている。同模型は、インド犁の進出以前には河西回廊東端部でチベット犁が普及していたことを物語るが、そのチベット犁もすでにキャップ式犁先を装着していたのであろう。おそらくそれは鑄鉄製であったであろう。というのは、シンチアン=ウイグル自治区北西部の伊寧南南西の昭蘇から、後漢時代の鑄鉄製犁先が出土しているからである。しかもその形態は、トルキスタン型インド犁のソケット式犁先に酷似している[陳文華編 1991: 194]。インド犁系列の犁とは無関係にソケット式の鑄鉄製犁先が、早い時期から東トルキスタンのシルク・ロードぞいに分布していたのである。

このように、非常に早発的な展開をとげた中国のソケット式鑄鉄製犁先が西に伝わり、その影響下に現在のトルキスタン型インド犁の犁先が成立したと考えられる。カラコルム奥地のパッソー村でのききとりは、同形の中国製鑄鉄製犁先がつい最近までもカシュガ

ルから将来されていたことを語っている。つまりトルキスタン型インド犁の犁先は、シルク・ロードを西進した文化交流の所産であった。眼を東南アジアに転ずると、南海ルートを通じて中国との接触が多かったタイ中央平原にも、ソケット式の鑄鉄製犁先が分布している。これも、中国の影響による所産と考えられる。

一方、トルキスタン型インド犁をふくむインド犁系の犁は、このソケット式犁先の流れとは逆にシルク・ロードを東進していった。その時期は、前述のとおり漢代以後唐代以前であろう。現在も、トルキスタン型インド犁はタリム盆地西半部にまでおよんでいる。そこから東方には、曲材の犁轆をもつ揺動犁へと犁体を変えながらも、インド犁系列の犁型をもつ犁が、同盆地東端の敦煌から河西回廊および蘭州を経て、西安を越えた関中地区にまで、つまり中華世界の奥ふかくにまで達している。このシルク・ロードにそって東進したインド犁の分布ベルトを、私は<インド犁の北方ルート>と名づけている。

このようにトルキスタン型インド犁をとりあげても、そのなかに、シルク・ロードを舞台として展開した東西交流、つまり犁型における西から東への、また鑄鉄製犁先における東から西への伝播をたどることができる。吉田先生とかつてお話ししたグンドゥズの犁は、決して孤立した存在ではなく、このような壮大な文化交流の所産であった。

[本稿は、文部省科学研究費国際学術研究「インド亜大陸における雑穀栽培とそれをめぐる農牧複合の研究」(課題番号01041055, 代表者阪本寧男)による成果の一部であり、整理にあたっては同一般研究A「地域比較の方法をめぐる学際研究」(課題番号00401019, 代表者応地利明)を使用した。地図の作成にあたっては、曾田菜穂美さんの助力を得た。以上すべてに感謝したい]。

注)

- 1) たとえば、唐代のものでは敦煌莫高窟の33・85・361・445の各窟また安西榆林窟の25窟が、五代のものでは敦煌莫高窟の6・100・146の各窟また安西榆林窟の20・38の各窟、宋代のものでは敦煌莫高窟の55・61の各窟の牛耕図が、いずれもこの特徴をもつインド犁系の犁を描いている。またインド犁による1頭びきの牛耕図としては、唐代では敦煌莫高窟の23窟、五代では敦煌莫高窟の108・146窟のものがある[陳文華編 1991:287-347]。しかし1頭びきの場合でも、犁轆は直材に描かれている。王進玉 1985:142によれば、敦煌莫高窟445窟を例外として、敦煌壁画の牛耕図のなかには現在のような曲材の犁轆をもつ犁はみられないという。したがって犁轆の曲材化は、この地方では宋代以後に進展したことになる。

参考文献

Академия Наук Казахской ССР, Институт, Истории, Археологии и Этнографии.

1980 *Хозяйство казахов на рубеже XIX-XX веков*, Алма-ата.

Академия Наук СССР, Институт Этнографии.

1967 *Русские, Историко-Этнографический Атлас*, Москва.

Haudricourt, A.G. et Jean-Brunhes Delamar, M.

1955 *L'Homme et la charrue travers le monde*, Paris.

Вавилов, Н. И.

1934 中央アジアの植物, 中村英司訳編『栽培植物発祥地の研究』, 八坂書房(1980), 所収.

Werth, E. (藪内芳彦・飯沼二郎訳)

1954 『農業文化の起源』, 岩波書店(1968).

王進玉

1985 敦煌壁画中農作図実地調査, 『農業考古』1985-2, 138-149.

応地利明

1987 犁の系譜と稲作, 渡部忠世責任編集『アジア稲作文化の生態基盤』(稲のアジア史1), 小学館, 所収.

織田武雄・末尾至行・応地利明

1967 『西南アジアの農業と農村』(京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告), 京都大学.

木原 均

1956 『砂漠と氷河の探険』, 朝日新聞社.

中華人民共和国農業部編

1958 『農業図譜』第1巻, 北京.

読売新聞社

1979 『中華人民共和国シルクロード文物展』.

陳文華編

1991 『中国古代農業科技史図譜』, 農業出版社.

陳文華・張忠寬編

1981 中国古代農業考古資料索引, 第二編生産工具, (四)犁, 『農業考古』1981-2.

宮崎市定

1957-a 宋代における石炭と鉄, 『宮崎市定全集 9 五代宋初』, 岩波書店(1992), 所収. (初出は『東方学』13, 1957).

1957-b シナの鉄について, 同上書所収. (初出は『史林』40-6, 1957).